WS-2 ワークショップ

琉球諸語における教材作成と展開：記述研究との関連から

當山 奈那（琉球大学）

要旨

本報告では、言語継承に必要な文法事項を網羅した、音声が主体の教材である音声教材セットの作成の取組と展開について述べる。本教材は、従来の語学教材では付属的だった音声を主体にし、文法事項や関連語彙を説明する（文字）テキストを音声の副次的な存在にした。教材作成のために収集した音声資料は記述研究のための重要な資料にもなる。包括的な文法事象をおさえた音声教材を作成すれば、文法書が話者の声付きで完成することになる。この点で、言語記述と教材作成は相補的な関係である。危機言語では、話者が健在なうちに教材を作成・運用し、地域の方々からフィードバックを得るという理論と実践によって教材のブラッシュアップが図りうる。

1. はじめに

琉球諸語は島嶼間の言語差が大きく、興味深い現象に満ちている。一方で、国内外で言語多様性を保持した言語継承が成功している地域は管見の限りみられず、琉球諸語においても、その言語多様性は継承の困難さの一因となっている。近年、琉球諸語を含む危機言語の国内研究においては、保存と継承に必要な研究やプロジェクトが盛んに行われている。しかし、学術的な成果に重きが置かれた記録保存としての研究がほとんどであり、地域の人が直接活用できるものではない。100 年先をみすえた研究が今できているのか？と私たちは今、改めて問わなければならない。本報告では、報告者らが実施した音声が主体の教材である「音声教材セット」の作成の取り組みを通して、危機言語において教材を作成することは、文法記述であり、言語記録でもあることを主張する。2 節では音声教材について紹介し、3 節では教材作成と文法記述の関連について述べる。

2. 「音声教材セット」について

2.1. これまでに作成した音声教材と特徴

総合地球環境学研究所の「アジア・太平洋における生物文化多様性の探求―伝統的生態知の発展的継承をめざして」予備研究（2013～2015）の成果として、報告者は 2016 年に国頭村奥集落の言語「ウクムニー（奥方言）」の「音声」教材である「ウクムニーペーハナレー（奥方言早習い）」を琉球大学の学生と一緒に作成・報告した（http://www.kyoto-up.or.jp/qrlink/201603/yanbaru/）。以降、琉球方言研究クラブ（2015）では、宮古島市の城辺福里方言の音声教材「フクザトフツピャーピャーナロー」を作成し

ている。また、琉球大学の卒業論文として、西島本麻衣（2017）が波照間島波照間方言の音声教材「パチルマムニペーシャナラスィ゜」、源河優香（2018）が多良間島塩川方言の音声教材「シュガーフツしあすば！」を作成した。これまでの言語教材が、一般に、「文字」を主、「音声」を従として扱う傾向があったのに対し、これらの教材では、「音声」を主、「文字」を従とする言語教材の必要性と可能性を提案し、作成している。琉球諸語のような言語では、読み書き以上に「聞いて話す」ことができるほうが重要である。危機言語は、英語のような大言語とは異なり、当該地域に住んでいても当該言語に接する機会はほとんどない。そこで、「聞いて話す」訓練に重点をおいた、音声が主体の教材を作成した。英語や日本語のように公式の書き言葉を持っている言語のほうが地球規模で考えると稀なのだとすれば、琉球諸語のみにとどまらず、多くの少数言語にとってこのような新しい教材の形はまた、この教材のもうひとつの大きな特徴は、琉球諸語のこれまでの言語学的知見に基づいた体系的な構成の教材である、という点である。

2.2.　教材構成

音声教材の教材構成は次の（ⅰ）～（ⅳ）のような内容を想定し、作成している。

（ⅰ）音声教材　（ⅱ）文字教材　（ⅲ）ワークシート　（ⅳ）指導用解説書

なお、特に（ⅲ）と（ⅳ）は、鈴木・工藤の『にほんごだいすき』シリーズの『ワークブック』『おしえかたガイド』をそれぞれ参考にしている。以下にひとつずつ紹介する。

（ⅰ）音声教材は、「当該言語に触れたことのない学習者が音声を通して繰り返し練習することによって、その方言で日常会話をすることができるようになる音声を媒体にした教材」である。車内や学校現場などでの使用を想定している。学校現場で使用する場合は、手引き書に従えば簡単に利用できるような内容にする必要がある。そのため、文章をみなくても、音声のみで当該言語を習得できる構成がふさわしい。「聞き流す」のみの内容にするのではなく、「聞く」「話す」のどちらも訓練できる内容をもつ。さらに、各課の構成を考える際、前の課で扱った内容の復習ができるとともに、ステップアップになるような内容を後の課にもってくるのが望ましい。

（ⅱ）文字教材は、「音声教材の内容を補完した上で、学習者が当該言語の言語体系をとらえられるような構造をもつ文字を媒体にした教材」である。音声を聞いてなんとなくつかんだ概要を、表や図で整理して体系的に捉え直すことができるのは、文字教材の強みである。琉球方言研究クラブ（2015）では「副読本」と「小冊子」という形で作成されている。副読本では各課の文法事項の解説や音声解説、関連語彙が掲載されている。小冊子は副読本の内容をコンパクトにまとめたものである。琉球方言研究クラブの（ⅰ）の媒体が CD であることを考慮して作成されたと思われる。小冊子は CD ケースに収納できるサイズになっている。

（ⅲ）ワークブックは、「学習者が（ⅰ）と（ⅱ）で学習し、理解したことの定着をはかる

ための練習帳」である。「書く」作業させるという点で、（ｉ）と大きく性質を異にする。この性質を活かして（ii）ともリンクさせ、当該言語のローマ字指導やかな文字指導も行えるような内容にする（その言語の語彙の指導は、ローマ字指導（音声指導・聴覚的手段）、かな文字指導（視覚的手段）、意味指導（対象指示）を三位一体的に行う必要がある。音声の確認・定着もはかる）。声に出してなんとなくわかった単語を「書く」ことによって、その文字の連続を単語に結び付けることができるようになる。ワークブックの構成も、「音声教材」と「文字教材」に沿った形にする。基本的問題と応用的問題を作り、学習者の状況に対応できるようにする。

（iv）指導用解説書は、「（ｉ）～（iii）に対応した指導用の解説書」である。（ｉ）～（iii）の全体的な解説のまとめと使用方法、これらの教材を使って実際に授業や講座を行うときの具体的な指導例、授業や講義をするうえで必要になるような最低限の理論的解説、方言教育の現場で問題になるコラム、あるいは当該言語の言語的背景、くらし、生きもの、歴史の話などのコラムを紹介する。巻末に（ｉ）～（iii）で用いられた語彙リストと用語解説を付録とする。

3.　教材作成と記述研究の関連

少数言語や危機言語の保持や継承のために必要な言語学者の仕事は、伝統的には、F・ボアズ（Franz Boas,1858-1942）、E・サピア（Edward Sapir,1884-1939）の①文法書、②辞書、③テキストの三点セットの作成だといわれている 。この 3 点に加え、近年、記録メディアの急速な発達によって、言語ドキュメンテーション （Himmelmann 1988）で提唱されている、包括的な一次資料（音声、映像）の収集・管理・公開も求められている。このような文法記述（Language description）と言語記録（Language documentation）とが、当該言語の基礎的研究とすると、これらの基礎的研究に学びながら言語教材を作成することは、言語再活性化（Language revitalization）に繋がる応用的な研究と捉えられる。

これまでの琉球諸語の研究では、多様な方言の記録としては充分とはいえないものの、学術的価値のみにとどまらない、言語保持と再活性化の条件づくりに不可欠の詳細かつ正確な記述と、かけがえのない人類の知的遺産を後世に伝える言語的資料とを残してきた。当該方言を母語とする者と研究機関に属する者とが協働して編さんしている質の高い辞書の出版も続いている。

音声教材セットは、先述したように、これまでの琉球諸語の研究の蓄積にもとづいた、体系的な教材を目指している。同時に、対象言語が危機言語であることを考慮して、言語再活性化に繋がる教材を作成しながら、文法記述と言語記録が可能になる構成にした。包括的な文法事象をおさえた教材を作成すれば、簡易文法書が話者の声付きで完成することになるはずである。また、教材作成を通して現行の記述言語研究が継承のために必要な記述について、足りていることと足りていないことも必然的に明らかになる。教材開発を通じて、逆に文法記述の充実も図ることができる。教材作成時に収集した用例は、文法記述

の際には、明確な場面設定がなされた用例として記述の対象になる。そこから、まだほとんどなされていない方言のモダリティ研究に繋げていくこともできる。文法記述の研究と教材を作成することを両立することは可能であり、むしろ両者は不可分であるといえよう。この 2 つが両輪となって、相互に連関しながら研究を発展させることができる。国頭村奥方言のように琉球諸語内でも話者の方が 50 人にも満たない [1]、高齢の方が多い言語では、言語記録や言語記述と並行しながら、体系的な教材をつくらなければならないという現状も存在する。琉球諸語にはこのような危機的な状況の言語も多い。

4. まとめ

本報告では、琉球諸語の教材作成に関して、音声が主体である教材について紹介しながら、記述研究との関連に焦点をあてて述べた。従来の言語記述を行うことも重要だが、島嶼の言語状況に沿った形の教材の開発と現場実践も急がなければならない。これは、言語再活性化の観点からは、島嶼間の言語多様性が魅力であると同時に継承の困難さの要因の一つになっている琉球諸語における問題解決のための具体的なモデルになりうる。言語話者が健在なうちに教材を作成し、実際に運用することによって、各島の生活者の方々からフィードバックを得ることができる。このような理論と実践の往復運動によって教材のブラッシュアップを図ることができる。

注

1　石原（2016）

参考文献

石原昌英（2016）「ウクムニー（奥方言）の活力と危機度について」『シークヮーサーの知恵』京都大学学術出版,pp378-401／かりまたしげひさ（2013）「琉球方言とその記録、再生の試み―学校教育における宮古方言教育の可能性」『琉球列島の言語と文化―その記録と継承』くろしお出版,pp21-44.／源河優香（2018）「多良間村塩川方言習得のための教材研究と教材作成」（琉球大学卒業論文）／鈴木重幸・工藤真由美（1996）『にほんごだいすき―おしえかたガイド―』むぎ書房.／西島本麻衣（2017）「波照間方言習得のための音声テキストの提案」（琉球大学卒業論文）／バーナード・コムリー（2002）「消滅の危機に瀕した言語の記録および保存」『消滅の危機に瀕した世界の言語－ことばと文化の多様性を守るために』明石書店,pp224-238.／琉球方言研究クラブ（2015）「宮古島城辺福里方言の音声テキストについて」（沖縄言語研究センター定例研究会発表資料,2015 年 12 月 19 日）また、本報告は、次の内容を含んでいます；當山奈那（2016）「奥方言（ウクムニー）習得のための音声テキスト試作版の作成」『シークヮーサーの知恵』京都大学出版会,pp.428-457.／當山奈那「百年後のあなたに―音声教材作成の展望」沖縄タイムス 2017 年 1 月 15 日―2 月 12 日.

・本研究は、琉球大学国際沖縄研究所 共同研究（平成 29 年度）、日本学術振興会若手研究（B）「国頭諸語の記述研究とドキュメンテーション（17K13455）」の助成を受けています。